

総長メッセージ

～京都大学支援者のみなさまへ～

「京都大学の原点に立ち返り、 研究大学としてのあり方を問い直す」

総長 湊 長博



はじめに

私は令和2年10月1日、第27代京都大学総長に就任いたしました。折しも新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる社会の混迷のただ中で、120年余の伝統をもつ本学の舵取りの重責を担うことになり、身の引き締まる思いです。

今日私達は、予想を超えるテンポで進行する地球の気候変動と大規模な自然災害や地球環境悪化、さまざまな国際的対立抗争の激化や格差の拡大、さらには昨今の新型コロナウイルスに代表される感染症の拡大など、地球上の人々の生命と健康を脅かす多くの困難な課題に直面しています。人は錯綜する困難な課題に直面し、方向を見失い判断に窮したとき、「そもそも自分は何がしたかったのか、どうありたかったのか」と初心に戻って考えると自ずと道筋が見えてくるものであり、社会が大きく変動し先行き不透明な時代を迎えつつある今、原点に戻って大学運営に努める所存です。

本レポートは本学が令和2年度に取り組んだ主な業務の実績をとりまとめたものです。本学の持続可能な価値創造の取り組みの概要をご紹介できるよう工夫いたしました。支援者のみなさまにおかれましては、本レポートによって本学の活動状況をご理解いただき、引き続き本学へのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和2年度を振り返って

令和2年度も、さまざまな取り組みを進めてきましたが、ここでは主に研究、教育、産官学連携活動において、新たに開始した組織を中心に概要をお示しします。

研究においては、まず令和2年4月に、医学部附属病院に「次世代医療・iPS細胞治療研究センター (Ki-CONNECT)」を設置しました。これはiPS細胞をはじめとする新しい医療技術や本病院が誇る統合医療データを医療・創薬の早期実用化につなげるための組織です。がんなどの難病や希少疾患における早期臨床試験のための専用病棟も完成し、8月には臨床試験が開始されました。また、同じく同年4月に文部科学省の認可と支援を受け、「がん免疫総合研究センター (CCII)」が正式に設置され、初代センター長にはノーベル生理学・医学賞受賞者の本庶佑高等研究院特別教授が就任しました。^{※1}日本初の「がん免疫」研究の拠点として、国際的研究ネットワーク形成を目指し、すでに研究活動を開始しています。これら基礎医学から臨床応用まで一貫した拠点をベースに、我が国の革新的医療開発の先導的役割を担っていくことが期待されています。さらに指定国立大学法人構想のもとに、これまで世界各国に10か所のさまざまな研究分野でのOn-site Laboratoryを設置し活動してきましたが、令和2年12月にはシンガポールの物質工学研究所に新たに11番目となる「グリーン多孔性材料ラボラトリ」を設置しました。これらは、本学の研究における国際展開の最前線としての活動が期待されています。

教育面においては、新しい大学院プログラムが始動しました。文部科学省による卓越大学院プログラムでは、令和元年度に採択された「メディカルイノベーション大学院プログラム」が、いよいよ令和2年度より学生を募集し、7月より履修を開始しました。さらに令和2年度には「社会を駆動するプラットフォーム学卓越大学院プログラム」が新たに採択されました。複数専攻領域からなるプラットフォーム学の知識と高度かつ独創的な基盤技術に関する研究力を取得できる教育プログラムを提供し、世界を牽引するプラットフォーム構築者の育成を目指していきます。先行している「先

(※1)がん免疫総合研究センター (CCII) については、39ページでご紹介しています。

総長メッセージ

～京都大学支援者のみなさまへ～

端光・電子デバイス創成学プログラム」を含め、三つの卓越大学院プログラムが進むこととなります。これらは、本学の理念である新領域開拓を目指す大学院教育の中核を成すものであり、将来の研究展開と人材養成のエンジンとなるでしょう。^{※2}

産官学連携については、新たにオープンイノベーション(OI)機構を学内の産学連携特区と位置付け、大型共同研究の推進に取り組む教員への「定年制の例外適用」や「研究代表者に対するインセンティブ加算」等の規制緩和策を導入し、令和2年7月から運用を開始しました。民間等共同研究における間接経費(産官学連携推進経費)率の引き上げなど、機構運営の自立化と研究開発環境の向上に資する投資的財源の確保のための環境整備も進めています。^{※3}令和2年度には、大学発ベンチャーの数も大幅な伸びを示しており、OI機構を中心とした産学連携活動の一層の推進が、本学の社会連携と財政基盤の強化に資することを大いに期待しています。

(※2) 卓越大学院プログラムについては、41ページでご紹介しています。

(※3) 共同研究における間接経費(産官学連携推進経費)の見直しについては、43ページでご紹介しています。

新型コロナウイルス感染症に対する取り組みについて

新型コロナウイルスの感染拡大により、本学も大きな影響を受けています。令和2年4月からの半年間は全面オンライン授業中心となり、学生と教員との直接的な対話がむずかしい状態となりました。令和2年10月からは対面授業を再開することができましたが、感染再拡大防止の観点から、ハイブリッド方式を導入してきました。令和3年度においては、附属病院の全面協力のもとで、教職員、学生を含む大学拠点ワクチン接種を精力的に進めています。

とくに懸念されたのが、学生の生活や活動への影響であり、令和2年度には第一次「緊急学生支援プラン」として、困窮する学生に対する緊急給付型奨学金の創設や授業料免除の大幅拡大を実施しました。本学では、意欲と能力のある学生が経済的理由で学びの機会を失うことがないように「京都大学修学支援基金」を設置していますが、今回の「緊急学生支援プラン」遂行にあってもこの基金を窓口として、教職員、卒業生をはじめ多くの方々から多大のご寄附をいただくことができました。まことにありがたく思っております。有為の学生達が、この困難な状況にあっても希望を失うことなく心身の健康を保ちながら学業を続けられるよう、引き続き最大限の努力を続けていく所存です。^{※4}

(※4) 新型コロナウイルス感染症に対する取り組みについては、11～12ページでご紹介しています。

新しい知的な価値を創造する研究大学として

大学の使命は、知的インフラの創生とそれを担っていく人材育成を通じて公共の利益に資することにあります。本学は、「地球社会の調和ある共存に貢献する」ことを基本理念として120年余の教育と研究の歴史を刻んできました。本学には現在、10の学部と18の大学院研究科に加え、30を超える附置研究所や教育研究施設等があり、極めて多彩な領域で研究教育活動を展開しています。先行きの不透明な時代を迎えている今日、私達は変化する時代の要請に的確かつ機動的に対応していくために、この多様性を担保しつつ研究力を一層強化していく責任を負っています。

このような強い研究大学に求められる要件は3点に集約されます。私はこれを三つのFと言っています。第一は「Faculty(教員集団・人材)」、優秀で高い自覚をもつ教職員組織を作ること。第二は「Facility(施設や環境)」、研究者が存分に力を発揮できる研究施設・設備および環境を確保すること。そして第三に「Fund(資金)」、これらを担保するための安定した財政的基盤の確立です。

この三つのFの充実を図りながら、強い研究組織をつくり上げるとともに、世界から信頼され、評価される研究者を輩出し続けていくというミッションの遂行に当たっていく所存です。

平成29年に本学は、文部科学大臣より第一次指定国立大学法人の指定を受けました。この指定にあたり私達は、新たな知の創造・イノベーションの確立・未来社会への指針を示すため「自由で独創的な知の創造を支える柔軟な研究組織体制」、「次世代を担う若手研究者の育成と若い頭脳の国際循環」、「新しい人文・社会科学の創出と社会への積極的な発信」、「ボトムアップの議論に基づく実効的の大学運営と財政基盤の強化」

の四つの大きな目標を掲げ、その具体化に向けて、プロボスト制^(※5)や戦略調整会議の導入をはじめとする、さまざまな施策を推進してきました。

令和3年度をもって、平成28年度から6年間の第3期中期目標・中期計画期間が終了します。来る第4期の中期目標・中期計画期間を視野に入れ、本年3月には、真に足腰の強い研究大学を目指し、組織のインフラの強化と改革を進めるための具体的施策として、「任期中の基本方針—世界に輝く研究大学を目指して—」を公表しました。^(※6)これを着実に実行していくことにより、本学の教育と研究の誇るべき伝統を未来に向けて確実に発展させていく覚悟を新たにしています。

最後に

本学は来る令和4年に創立125周年を迎えます。創立125周年という記念すべき時を機に、「国際競争力強化」、「研究力強化」、「社会連携推進」を中心として記念事業を展開していく予定です。^(※7)創立125周年に向けて、「京大力、新輝点。」というスローガンを制定しました。「京都大学からはつねに独創的で画期的な新しい何か生まれる」という、125年の歴史の中で築き上げてきたレピュテーションを失わず、より強固なものとしていくために、125周年を大切に迎える準備を進めていきたいと考えています。

これまで本学は、独創性と多様性を尊ぶ開拓精神の学風のもと、多くの豊穡な果実を結んできましたが、未来に向けて美しい実を結び続けていくためには、同時に新しい苗木を植え、正しく育てていく必要があります。120年余にわたる本学の力強い歩みを確実に未来に繋ぎ、新たな知的価値の創出と豊かな人材の養成によって、社会に貢献する大学であり続けるために、全力を尽くしていく所存です。

令和3年9月

総長 湊 長博



(※5)「プロボスト制」については、35ページでご紹介しています。

(※6)「任期中の基本方針—世界に輝く研究大学を目指して—」については、16ページでご紹介しています。

(※7)創立125周年記念事業については、30ページでご紹介しています。